

石川県立美術館だより

平成15年11月1日発行 第241号

第50回 日本伝統工芸展 金沢展

11月7日(金)~16日(日) 会期中無休 午前9時30分~午後5時(入館は午後4時30分まで)



高松宮記念賞 乾漆朱塗蓋物 築地久弥



日本工芸会保持者賞 重ね象嵌臙銀花器「草原の森」 中川 衛



NHK会長賞 神代楡挽曲造食籠 灰外達夫

目次

第50回日本伝統工芸展 金沢展	2
婚礼調度の美、石川県の名宝	3
風景画を楽しむ	4
常設展示室 主な展示作品	4
美術館小史・余話(38)	5

展覧会回顧(美術の動物園)	5
連続講座報告・第1回(美術館よもやま話・)	6
企画展示室、企画展TOPIC	7
11月の行事案内他	7
所蔵品紹介、ミュージアムショップ通信他	8

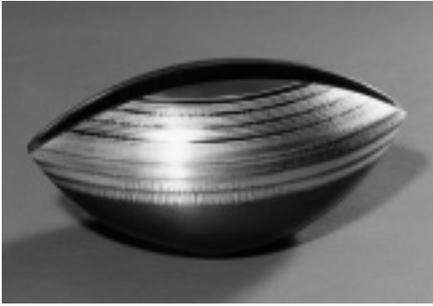
URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>

企画展示室(第7~9展示室)

第50回日本伝統工芸展 金沢展

11月7日(金)~16日(日)会期中無休

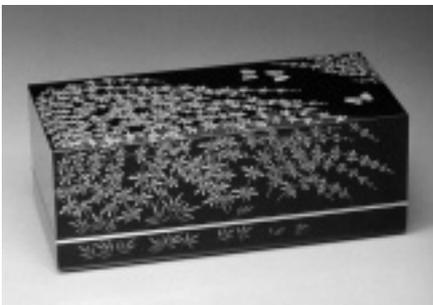
主催/石川県教育委員会・日本放送協会
朝日新聞社・北國新聞社・日本工芸会
後援/文化庁・富山県教育委員会・福井県教育委員会



日本工芸会新人賞 象嵌花器 櫻井雅之



日本工芸会新人賞 櫛造盛器 中嶋武仁



沈金箱「朝露」 前史雄



碧明耀彩壺 徳田八十吉



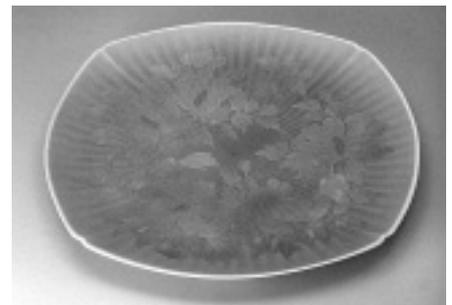
砂張銅鑼 魚住為染



平文富士光平壺 大場松魚



櫛造盛器 川北良造



釉裏金彩木樞文四方皿 吉田美統

恒例の日本伝統工芸展を開催いたします。わが国は各地の風土に根ざした工芸品を生み出し、そしてその伝統技術を大切に継承し発展させてきました。日本伝統工芸展は、優れた伝統技術の保護と後継者の育成ならびに伝統工芸に対する普及を目的として毎年開かれているものです。

今回は陶芸・染織・漆芸・金工・木竹工・人形・その他の工芸(七宝・硝子・瑪瑙細工・截金など)の七部門の入選作品七百四十四点(遺作五点を含む)の中から、重要無形文化財保持者・受賞者等の基本作品と、石川・富山・福井の各県、及びその他の県の入選作品約三百五十点を展示します。

今年の石川県内の入選者は九十二人で、これは都道府県別では最多人数です。また入賞者全二十一のうち、五名までが石川県出身者でした。まず漆芸の築地久弥氏が高松宮記念賞、木竹工の灰外達夫氏がNHK会長賞を、そして金工の櫻井雅之氏と木竹工の中嶋武仁氏が、それぞれ日本工芸会新人賞を受賞。さらに鑑査委員・持待者の中から選ばれる日本工芸会保持者賞は、金工の中川衛氏が受賞しました。

また今年度の「特別展示わざを伝える」では「蒔」の制作作品を展示し、同会の研修風景を収録したビデオもあわせて上映いたします。

列品解説
会期中11月7日午前、9日午後、13日午後を除く毎日、午前11時と午後1時30分からの2回、人間国宝の先生を含む出品者などによる列品解説を行います。

講演会 聴講無料
演題 金沢展40年を振り返って
講師 嶋崎 丞 石川県立美術館館長
日時 11月9日(日)午後1時30分
会場 当館ホール

一般 600円	個人
大学生 400円	
高校生以下は 無料	
一般 500円	団体(20名以上)
大学生 300円	
高校生以下は 無料	

観覧料
テレビ放映
北陸三県のNHK総合テレビで、11月9日(日)午前8時から本展の番組放映があります。再放送は11月14日(金)午後7時55分から、15日(土)午前10時5分からです。

常設展示室(前田育徳会展示室)

特集

婚礼調度の美

11月7日(金)~30日(日)

婚礼調度とは、婚礼にあたって女性の家から嫁ぎ先へ持参された「嫁入り道具」のことです。それら化粧道具・文房具・遊戯具などは、蒔絵で家紋が散らされた豪華な装飾で、意匠も統一されていました。前田家では、徳川家からの輿入れが多く、將軍家からの輿入れに際しては、新しい御殿(御守殿)を新築して、姫君を迎えています。本特集で紹介するのは、十三代藩主斉泰に嫁いだ十一代將軍家斉の二十一女・借子(溶姫)の婚礼調度ですが、溶姫を迎える際に建てられた御守殿門は、現在、東京大学にある「赤門」としてよく知られています。

眉作箱

化粧道具を入れる手箱です。中は二段になっており、丸鏡・白粉箱・化粧水入・こね墨入・眉箒(大小)・歯黒筆・紅筆などが納められています。

歯黒箱

お歯黒の道具を入れる箱です。歯黒の原料である五倍子粉しのこを入れる附子箱、銀製の歯黒次ぎ、五倍子粉を溶かす容器である漣子などが納められています。

短冊箱

短冊を納めるための長方形の箱です。いつでも短冊に詩文が書けるように、懸子には硯・水滴・筆が納められています。

源氏箱

各種の香木を入れる箱です。中には六つの小箱が納められ、『源氏物語』のうち、「桐壺」「帚木」「若紫」「紅葉賀」「花宴」「葵」の各帖を意匠化したものが蒔絵で施されています。

石川県には、歴史のあるいは芸術的に優れた文化財が数多く伝えられています。これは、江戸時代に加賀藩主としてこの地を支配した、前田家の文化的施策が大きな要因の一つであると言われていています。そしてこうした歴史的背景を基盤とするところの石川の文化風土は、芸術・文化全般に対する高い関心というかたちで今日に引き継がれています。

地域的に見ると、能登地区は日本海の海上交通により、大陸との接触が早くから行われたため、その文化財は、歴史的な風土や文化を色濃く物語るものを中心としています。一方、加賀地区では、古代・中世において白山信仰の中心であったことや、中央の社寺の荘園として開かれたことにより、それを反映する文化財が残っています。また、江戸時代に前田家に加賀藩主となつて文化の展開をみせて以降は、前田家を中心とする収集・育成された文化財が伝えられています。

当館ではこのような文化財、とりわけ美術工芸品を中心に収集活動を行っています。ほかに、保存と活用を目的として、県内の社寺や個人の方々から、指定文化財を含む多くの作品の寄託を受けています。

今回の展示は、先人の遺した石川県の貴重な文化遺産の一端を知っていただく目的で、館藏品、寄託品の中から、国宝一点、重要文化財十一點、石川県指定文化財八點、あわせて二十點を展示します。

その内の一点、県文「光悦色紙貼交秋草図」を紹介いたします。金地屏風に三十六枚の色紙を貼り交ぜたもので、その色紙は宗達の下絵に光悦の書という「古今和歌集」の歌、春二十七首、秋七首、冬二首がしたためられています。余白の金地には、彩色で薄・菊・桔梗などの秋草を装飾的に描いており、昆虫の配置にも工夫が見られます。秋草の筆者は明らかではありませんが、金地と書の色、極彩色の秋草など彩色が豊かで、装飾性があり、情緒に富んだ作品です。もと大聖寺藩主前田家に伝来したものと伝えられています。

常設展示室(第2展示室)

特集

石川県の名宝

11月7日(金)~30日(日)



光悦色紙貼交秋草図

常設展示室(第3~6展示室)

特集

風景画を楽しむ

11月7日(金)~30日(日)



運河のほとり 藤本東一良



阿蘇風 西山英雄

木々の緑、空の青を目にすれば心が和みますし、春は桜、秋は紅葉に色づく山々を眺めれば、感無量、絶景かなと感嘆の声をあげたくなります。こうした感情は、人ならば誰しもが持ち得るものでしょう。

一方それと共に、きわめて個人色の強い、人それぞれの思い出が、必ず風景には伴うものです。いつかどこかで見た景色だなと感じたとき、その時代にフィードバックし、風のそよぎや匂いや音が当時の思いとともによみがえることがあります。

こうした共通感情と個人感情、その双方を絡み合わせて描かれる風景画が、とても魅力的なジャンルであることは言うまでもないことですが、さらにその魅力には、居ながらにして旅する、発見する喜びを加えることができます。一度も旅したことのない場所であれば、目にする全てがもの珍しく、ワクワクとあちこちを眺めて想像をふくらませ、旅の疑似体験を味わうことができるのです。

そしてもうひとつ、画家の目、つまり、視点と表現方法も大きな魅力でしょう。巨大な波頭や桶の間から富士を描いたのは北斎ですが、彼によつてこうした視点があることを人々は知ったのです。また、刻々と変わる陽光に移ろふ景色を、モネは筆触分割で描いたのですが、こうした表現が可能なることを、人はこの時初めて知ったのです。

今回の特集では、日本画、洋画、水彩画、版画といった、異なる技法、異なるジャンルにおいてどのような風景が描かれているかを、ご覧いただければ幸いです。日本画と洋画のものの見方、空間表現の違い、こうした大作と、現場で一気にかかれたスケッチとの違い、そしていくつかの手順を経て制作される版画との違い、興味はなかなか尽きないと思います。

主な作品

阿蘇風

山里

運河のほとり

牧場への道

西山英雄

石川 義

藤本東一良

森本仁平

前田育徳会展示室

特集 婚礼調度の美
3ページをご覧ください

第1展示室

●色絵雄香炉
色絵雌雄香炉

野々村仁清
野々村仁清

第2展示室

特集 石川県の名宝
●剣銘 吉光
光悦色紙貼交秋草図
埴輪男子立像
色絵鶴かるた文平鉢 古九谷
青手桜花散文平鉢 古九谷

白山比 神社蔵

第3展示室

特集 風景画を楽しむ
上段をご覧ください

第4展示室

油彩画
樹間の家
麦秋
戸隠山
彫塑
粧い
折られていた花

岡田三郎助
村田省蔵
清水錬徳

第5展示室

(工芸)
萌黄釉裏金彩菌朶文鉢
秋野泥絵平卓
友禅訪問着「からまつ」
加賀象嵌孔雀香炉

矩 幸成
木村珪二

第6展示室

秋
宿屋
安宅弥吉像
望郷を歌う
観覧料

下村正一
山本 隆
中村研一
鴨居 玲

第6展示室

(日本画・油彩画)
下村正一
山本 隆
中村研一
鴨居 玲

竹田有恒
松田権六
每田仁郎
高橋介州

一般 350円	個人	一般 280円	団体(20名以上)
大学生 280円		大学生 220円	
高校生以下は 無料	高校生以下は 無料		



加賀象嵌孔雀香炉 高橋介州



折られていた花 木村珪二

常設展示室 主な展示作品

11月7日(金)~30日(日)

●=国宝 =重要文化財
=石川県指定文化財

新美術館開設に向けて(3)

昭和55年4月1日付で、新美術館開設準備室が設置されたことは先回に述べた通りであるが、準備室でまず最初にすべきことは、美術館の基本構想の原案を作成することであった。美術館が全く無い地域ならいざ知らず、現に石川県美術館が活動しており、そこにもう一つ美術館を新設しようということであり、それなりの理由や位置づけを考える必要があった。

私共開設準備室のスタッフに対して、専門的事項をアドバイスする新美術館専門懇話会も設置され、基本構想作成について議論がたびたび重ねられ、一ヶ月半位の間に原案を作成することができた。5月22日の開設準備委員会の承認を得て、26日には知事と県議会に対して答申が行われた。

概要を記すと次の通りである。

使命、性格について

- (1) 地方色豊かな美術館づくりを目指し、石川の地に育まれた美術の伝統を運営の柱とする。
- (2) 常設展示部門は、地域的個性を示す展示とし、前田育徳会所蔵品を展示する育徳会展示室を併設する。企画展示室では、内外の優れた美術品による意欲的な企画展を開催する。
- (3) 展示機能は、古美術から現代美術にまで対応できるように工夫した総合美術館形式を採用する。
- (4) 調査研究・情報資料の収集発信、教育活動の実施等多様な美術館活動を積極的に実施する。
- (5) 従来からの石川県美術館は分館とし、石川県の工芸の歴史的流れを見せる常設展示館とする。

以上のようにあり、今日大いに議論されている使命、性格が明確に記されていると思う。

展覧会回顧

夏休み 親子で楽しむ美術館 美術の動物園

夏休み期間中の新しい企画として、さまざまな年代の方々に、わかりやすく、楽しみながら美術に親しむことが出来るように、身近な題材の中から動物をテーマに取り上げた展覧会でしたが、皆さん足を運んでいただけたでしょうか？

日本画、油彩画、彫刻、それぞれたくさんの種類の動物たちが第6展示室で皆さんを待ち構えていたのですが、今回は親子、しかも小さなお子さんにも展示を楽しんでいただくという考えがあったので、
・展示の作品の目線をほかの展示室より低く設定する
・文字の説明で得る情報を必要最低限に抑える
・彫刻台で山を作り、その上にたくさんの動物を並べる

など、普段の展示室とは違う試みがあったので、常設展示室を順番に廻ってこられたお客様はこちらの展示室に入ると「あれ？」と思われたのではないのでしょうか。

今回文字情報を少なくしたので、作品の解説の代わりに何ですが、親子クイズを設けました。展示室を訪れた親子連れの方に、お子様用冊子には問題を、保護者用冊子にはクイズの問題と、そこに解説・解答を付けたものを準備し、普段どおりの作品鑑賞を楽しむほかに、展示室内を親子で会話しながら、問題に沿って作品をじっくり鑑賞したり、そのクイズを手がかりにして、新たな発見を楽しめた方々も多かったことと思います。

また、展示室内の休憩用いすには、かねてから実現したかったのですが、一般の絵本や読本に比べて、ふれる機会が少ない児童向けの美術専門の絵本や本を置くということもでき、展示室内で、絵に囲まれ

ながら学校の教科書とは違う美術本を味わうことが出来るようになっておりました。子供たちと一緒に大人たちも混じって、わかりやすく、楽しく絵画などについて説明されている本をのんびりゆっくり、楽しんでいる姿がたくさん見受けられ、とても嬉しく思いました。

この他、関連行事としまして「夏休み 親子で楽しむ美術館 親子で鑑賞会」と題して、小学生とその保護者を対象に作品鑑賞を楽しみ、美術に親しんでいただくワークショップを設けました。彫刻・古美術・絵画と分野・学年を分けて参加者を募ったのですが、おかげ様でたくさんのご応募をいただき、抽選とさせていただきます。関心の高さに驚かされました。参加された皆さんは「楽しかった。美術館に親しみをもてた。」「違う分野にも参加したかった。」「子供には難しいと思っていた鑑賞も、上手に楽しく参加して親が関心しておりました。」など、たくさんの良かったという声をいただきました。今年度初めての催し物が目白押しだったので、今年限りではなく、夏休み行事として続けて行きたいと思っております。



今年の夏休みはたくさんの親子連れの方々に常設展示室での鑑賞を楽しんでいただけました。毎月テーマは変わっても、2階常設展の観覧料は高校生以下無料となっております。難しいかな？ などと思う前にぜひ足を運んでください。親子で、またお孫さんと、鑑賞の時間を過ごして頂ければと思います。
(西ゆう子 学芸員)

● 連続講座報告・第1回 ●
 開館20周年記念連続講座
 「美術館よもやま話」
 講師:嶋崎 丞(当館館長)

国宝「雉香炉」と石川県立美術館(5月18日)

この美術館の前身は昭和34年に開館しており、もう40数年たっております。その美術館を準備していたときの収蔵品第1号が、山川庄太郎さんから御寄附いただいた国宝「色絵雉香炉」で、その寄附が美術館の建設にもつながっていったわけです。

まず「雉香炉」の制作年代が、一体いつ頃なのかがということがいつも議論になります。最近の研究によりますと、3代藩主前田利常の亡くなる1658年までに、果たして「雉香炉」が出来ていたのかには色々疑問を呈する研究者も出てまいりました。そうすると5代綱紀の初期の年代、寛文の年代くらいが、今日制作年代として推定されているところです。

「雉香炉」を拝領したのが利常の御小姓であった横浜茂元で、加賀藩の由緒書などに出てまいります。横浜家の記録を見てみますと、天保6年に当主が行方不明となり、手を尽くして探して見たら、大聖寺藩領の那谷寺付近で徘徊しているのが発見され、これはまったくどうにもならないということで、横浜家は知行を召し上げられてしまいます。

その横浜家の屋敷は、現在の美術館の目の前にある能楽堂あたりにあったようで、まさにほかならぬ因縁を感じているわけであります。そして、横浜家は経済的に大変困り、「雉香炉」を質屋をやっていた山川家初代甚兵衛の元に持って行き、やがてお金を返す事が出来なくなり、そのまま山川家のコレクションとなったようです。

そして山川家は代々大事にしてこられたわけですが、昭和33年に昭和天皇と皇后が行幸啓されることになりました。その時に、ほかならぬ山川家の「雉香炉」をお見せしたらどうだろうかという話が出たと聞いております。実は前年に、庄太郎さんの奥様が亡くなられ、庄太郎さんはお一人になられたわけです。その時にこの「雉香炉」を守り伝えるということが大変肩に重くのしかかっていたということで、何時かの時点でどこかへ寄附すべきものではなかろうかと思われたようです。それと同時に、34年に石川県が美術館を開館する準備も始まっており、天皇皇后両陛下の行幸啓の記念と、この美術館の開館を記念して「雉香炉」を県へお譲りいただけないかと、当時の副知事がお願いにあがったのはそういうことです。

なお、その時に「雉香炉」をご覧になられた昭和天皇は、個人の財産であると同時に国の宝でもあるので、今後ともくれぐれも大切にこれを保管されるようにとお言葉があり、それを伝え聞いた山川庄太郎さんは、目から涙を流して感激されたとのことでした。

古九谷と石川県立美術館(6月29日)

古九谷については、日本一の傑出したコレクションであると思っております。こういう芸術文化という、人間が心の中で考えるような世界ですけれども、発祥の議論ということでは、いわゆる古伊万里の初期の段階における焼き物を、全部古九谷と言うべきだという意見すら出ているような状態で、九谷側が大変不利な状況に立っていることは否めない事実です。しかし、古九谷はやっぱり石川県の優れた焼き物であるという考え方だけは、少なくとも私がいる間はそれは変えたくないと思っています。

そもそも九谷焼というのは、山中町の奥にある九谷という集落の名前で、九谷古窯という登窯の史跡が残されており、その地名から九谷焼という名称がついたのだと考えられます。その中で九谷焼の歴史の中で最も早い時期に焼かれたものを、一般的な概念として古九谷と呼んでおります。

文献資料をみてゆくと、まず浅野屋次郎兵衛浄全の茶会記録『臘月庵日記』の1686年に「九谷焼水指」の記事があり、1803年の見聞記録である塚谷沢右衛門の著した『発憩紀聞』には、発掘してみたら小さなかけらがたくさん出て来て、「九谷焼の見本にもなるべけれ」と書いてあることから、その当時既に九谷焼という一つの概念があり、古九谷年代からの延長線上における焼き物生産があったという考え方が出来るのではないのでしょうか。

また、1845年に奥村永世が編纂した『藩国見聞録』には「当時古九谷焼と称し甚だ賞翫に及べり」という記述があり、初めて文献の上に古九谷という名称が確認できます。この年代には、既に古九谷は非常に素晴らしいものだという考え方が出来あがっていたと考えられます。

それに加えて、新しい資料が出てまいりました。江戸時代の終わりの金沢における、今日でいう美術倶楽部の道具市の入札記録が発見されました。それをみましたら、伊万里焼とは別個にちゃんと古九谷、それも皿ではなく平鉢という名称で書かれてありました。そのほか、当館収蔵の『明治15年博物館臨時開館古器物図模様』という工芸図案集の中には、何々家の古九谷を見てこの図案を描いたというものが残っております。このことから、江戸時代の終わりくらいには、きちんと古九谷という世界が完成していたのではないかと私は思っています。

九谷焼は確かに年代ごと、窯ごとに多少技法などは変わっております。しかし根本的にベースとして流れる技法、はたまた色彩感覚と言うのでしょうか、そういうものは統一されているのではないのでしょうか。決して古九谷が有田の初期であって、古九谷的なものが柿右衛門に変わるほどの変わり方は、私はしていないと思っていますのですけれども。

企画展TOPIC

「北陸の人間国宝展」 前編

開館20周年を迎えた本年度最後の企画展として、当館がこれまでに積極的に取り組んできた工芸分野に焦点をあてたのが、本展です。

周知のように、石川県では人間国宝と呼ばれる国の重要無形文化財保持者に、現在まで17名の方が認定されています。これは、一つの県としては特筆すべきことで、加賀藩以来の美術工芸育成策、そして近代以降も日本で最初の中等美術教育機関として明治20年に開校された現在の石川県立工業高校や、戦後すぐに開校された金沢美術工芸大学などの教育機関の充実もあって、文字通り歴史と伝統が常に創造活動ともに息づいている地域だと言えます。

当館ではそうした中で、近現代の工芸作品の収集とともに、それに関連する展覧会を多く開催してまいりました。中でも、昭和60年の「人間国 匠のわざ 重要無形文化財の人々」は当時の人間国宝の作品を全国で初めて一堂に会したものであり、平成元年の「石川県の人間国宝展」は、作品のみならず、映画やビデオも多く活用した展示とし、それぞれ好評を得ております。今回は、後者の展覧会以後石川県から新たに認定された6名の方を紹介するとともに、歴史的地理的にも縁の深い富山・福井両県の各2名の方々、そして石川県での活動が極めて重要な位置を占める2名の方々をあわせ、計23名の人間国宝の代表作をまとめて見ていただくこととするものです。

(寺尾健一 普及課長)



西出大三 截金彩色木彫合子「華鳥」
昭和55 第27回日本伝統工芸展

「開館20周年記念 北陸の人間国宝展」の会期は
1月4日(日)~2月2日(月)

企画展示室

再興第88回院展金沢展

11月19日(水)~30日(日)(第7~9展示室)

主催/財団法人 日本美術院・北國新聞社
石川県立美術館・財団法人 石川県芸術文化協会

現代日本画壇の最高峰の作品を網羅した「院展」を3年ぶりに金沢で開催します。今秋東京都美術館で開かれた本展から、片岡球子、福王子法林、松尾敏男、郷倉和子、那波多目功一(以上日本芸術院会員)、平山郁夫、下田義寛の各氏ら大家、人気作家の代表作に一般応募の入選作を合わせた95点を一堂に展示します。

入場料 一般 1,000円(800円)
中高生 600円(400円)
小学生 500円(300円)

()内は団体料金

当館友の会会員は、会員証提示により団体料金になります。

連絡先 金沢市香林坊2-5-1 北國新聞事業局
TEL 076-260-3581



平山郁夫 平成洛中洛外図(右)

ミュージアム・コンサート

オーケストラアンサンブル金沢による室内楽です。応募方法、プログラム、演奏者等詳細は次号でお知らせします。奮ってご参加下さい。

日時 平成16年1月に予定しております。
場所 当館ホール

11月の行事案内 《入場無料・いずれも午後1時30分から行います》

月日	行事	内容	会場
11/1(土)	土曜講座	教科書美術館 版画 (西ゆう子 学芸員)	講義室
11/2(日)	月例映画会	世阿弥の能(48分)	ホール
11/9(日)	連続講座	開館20周年記念連続講座・第50回日本伝統工芸展記念講演会 美術館よもやま話 日本伝統工芸展金沢展40年を振り返って 講師 嶋崎 丞(当館館長)	ホール
11/22(土)	土曜講座	漆芸の魅力9 平安~桃山 (寺尾健一 普及課長)	講義室
11/23(日)	月例映画会	速水御舟 その壮烈果敢な芸術生涯(23分) 型絵染 芹沢銈介(25分)	ホール
11/29(土)	土曜講座	仏像46 聖徳太子信仰と四天王寺 (谷口 出 学芸専門員)	講義室
11/30(日)	CDコンサート	20世紀の名指揮者 レナード・バーンスタイン 1 ブラームス 交響曲第2番ほか(約60分) 演奏 ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団	ホール

11月の全館休館日は4日(火)~6日(木)です。

毎田仁郎氏は明治39年(1906)金沢市に生まれました。京都で友禅の仕事をしていた遠縁に当たる下村光鳳に13才の時に弟子入りをし、この道に入ります。しかし、次第に第二次大戦が激しくなり、昭和19年に金沢に疎開、戦後そのまま金沢で仕事を続けることとなります。金沢に戻ってからは木村雨山に師事し、木村氏の強い薦めで昭和41年第13回日本伝統工芸展に60歳で、初出品、初入選を果たします。その後、昭和55年には日本工芸会奨励賞、そしてこの作品で63年には高松宮記念賞を受賞します。

本作品は、毎田氏が落葉松林の取材に信州戸隠高原を訪れたときに、新芽の出がけの美しさに心を引かれ、その感動を表現したものです。肩の部分と裾の部分とを色変わりにし、より力強い表現をするためにあえて糸目を残さない堰出し技法を使用、防染用の糊の厚みに差をつけて置く糊うたし技法を何回も重ね、色も何度も塗り重ねて深みを出してあります。大空を表現している地色の白がすすがしく、作者独特の落ち着いた色調の中に斬新な感覚が盛り込まれ、全体から清新さを感じられる作品です。

第5展示室で11月7日～30日まで展示中



友禅訪問着「からまつ」

毎田仁郎 明治39年(1906)～平成5年(1993)

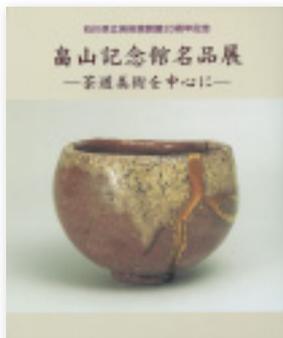
昭和63年 1988

第35回日本伝統工芸展高松宮記念賞

丈175.0 衿68.0(cm)

ミュージアムショップ通信

当館が開館して20年…。その記念として今年は企画展・行事等に力をいれています。初めての試みである当館の所蔵品を使っの石川県民大茶会は、多くの方々に参加していただき、大盛況でした。また、畠山記念館名品展では、茶道美術を中心に国宝や重要文化財を含む100点が展示されました。茶道を嗜む方にとっては、この上ない価値のある名品ばかりだったことでしょう。そこで、今月は『畠山記念館名品展』を紹介いたします。畠山記念館名品展の展覧会図録です。是非お手元に一冊どうぞ。展覧会は11月3日まで開催しておりますので、「あら、まだ行ってなかったわ。」という方は、お急ぎ下さい。ご来館をお待ちしております。



畠山記念館名品展(定価2,200円)

次回の展覧会

特集 天神画像と文房具
(前田育徳会展示室)

特集 大乘寺の文化財 (第2展示室)

特集 彫刻 木のかたち・石のかたち
(第4展示室)

12月3日(水)～12月24日(水)

休館日:11月4日(火)～6日(木)

石川県立美術館だより 第241号

2003年11月1日発行

〒920-0963 金沢市出羽町2番1号

TEL 076(231)7580 FAX 076(224)9550

URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>